

毎 日 歌 壇

米川千嘉子 選

雨のよに落ちてくる訃報受け止めて誰かの誰
 だった日々思う 名古屋市 外山 雪
 △評▽過去に浅からぬ縁のあった人の訃報
 が続いたのか。その人となりがついていた自
 分も無くなる寂しさ。下句が心に残る。
 AIに感謝の気持ち伝えているシーンが見え
 る未来の介護 塩釜市 高橋 永喜
 △評▽本当に感謝しているかAIが計っ
 て、介護の態度を変えたりするかも？
 洗ってもタッパーに残る粕漬の匂いよ故郷は
 断り切り難し 千葉市 深海 泰史
 成長を止めぬ宇宙を憐れんで死を待つベテル
 ギウスの赤色 愛媛 川村 栄
 「再婚をしてもいいよ」という妻を黙して見
 つめし日暮れの病室 野田市 石原 典武
 独り居は自由でなかなかいいものとおいの
 矜持をはりあう男 東京 青木 公正
 この角に和菓子屋さんがあったのよ新築群へ
 そっと教える 枚方市 坊 真由美
 ハンコ押すみたいな感じでギョルギョルとあな
 たに押し急押しをする 広島市 堀 眞希
 使用不可とを触って壊したか夫は八十三無
 理かもスマホ 尼崎市 小石 絹子
 乳母車からみどりの児はじっと見る里山に咲く
 雪割桜 須崎市 野中 泰佑

加藤 治郎 選

終点で起こしてくれた車掌さん わたしは朝
 の宇宙を歩く 狭山市 りんか
 △評▽始発電車かもしれない。わたしは熟
 睡していたのだ。車掌さんに感謝する。夜
 の記憶を宇宙と感じながら歩いている。
 まひるまの太浴場に柑橘と浮かんで我らみな
 無人島 長岡市 三月 とあ
 △評▽かんきつとともに浮かんでいるとき
 頭部は無人島に見える。少し怖い発想だ。
 ふくよかな母大福ふくむとき含んでみせた
 透ける紅色 東京 石井 しい
 どの午後もひかりの経田地とおもうビル・エヴァン
 スのはるかな息継ぎ さいたま市 霧島あきら
 その人は月をわたしたは星を見てひとりひと
 りのための露天湯 武蔵野市 北谷 雪
 青色は部屋十シートの向こう側築60年のア
 パートの屋根 札幌市 橋 晃弘
 ひとりでもさむくないです南の島
 でくらしています 宮古島市 塩見 伴
 「生きたくない」って言ってしまった帰り道 あなた
 をゆづり追い越してゆく 所沢市 神田 望
 恢復と書いては消してけしていま簡単でな
 い夢をみている 平塚市 芝澤 樹
 現れたヒーローはすこし頼りないけれど誰よ
 り澄んでいるひと 四万十市 佐竹 紫円

水原 紫苑 選

革命のように剥かれてラ・フランスのしろいく
 びれに疲れが溜まる 加古川市 石村 まい
 △評▽革命に疲れれた果物は王が貴族か。ま
 だ首を落とされてはいないラ・フランス
 よ、永遠に生きよ。
 色褪せた写真にナイフを切りつけて流れ星を
 降らせることにする 横濱市 砂月 七
 △評▽時間をさかのぼって、自分で降らせ
 る流れ星は、一体誰の魂だろうか。
 讃美歌の流れる教会のような許す仕事を母は
 とまわり 京都市 よだか
 水差しを取り上げられて物を乞ふ姿となりし
 三人官女 相模原市 高田 祥聖
 アマゾンの上流あたりを舞う蝶は二十四色
 を飛び越えている 札幌市 橋 晃弘
 海をなせ母と呼ぶのか川たちの墓の底から這
 って出たなら 四日市市 早川 和博
 あたたかなひかりのなかに続々と消えてゆき
 たる白鳥の群れ 見附市 有村 桔梗
 アッシュールバニパル王も戦争を恐れていた
 と唄う海豚は 浜松市 尾内甲太郎
 宇宙から眺めし地球は水光るローマ時代の水
 道橋も 加古川市 畑 啓之
 行きずりの家の表札に「椿」とふ庭に椿の
 三色の花 香取市 嶋田 武夫

伊藤 一彦 選

痛いところぐにわかるよそう言っただけの夫
 が私をほぐす 枚方市 坊 真由美
 △評▽夫も過労で体のあちこち痛いのだろ
 う。だから妻の痛いところもすぐ分かるの
 だ。夫への理解と愛情が伝わる作である。
 もう母はいないし誰も叱らない歩き食いする
 鯛焼きの味 東京 河野多香子
 △評▽かつてのたい焼きの方がおいしかっ
 たはず。叱られたことも懐かしい思い出。
 温泉に浸かり講義をしています出会った人に
 教えを請われ 守谷市 クボタヨウジ
 みなかみの出湯のふちの雪を割るふきのたう
 とわれすつばだか 横浜市 谷口 菜月
 枯れ枝に誰かの手ぶくろ 握手ならいつでも
 どうぞといった顔して 長岡市 三月 とあ
 どのような球も返すという意気でラリー続け
 る言葉のテニス 札幌市 住吉和歌子
 いじめっ子のあいつと握手しろなんて僕も言わ
 れた ゼレンスキーさん 春日市 伊藤 亮
 歴史とは学ばぬことを悔やむため有るかのよ
 うな世界の政治 塩釜市 高橋 永喜
 手榴弾を捕虜になるなど渡されし八十年前
 そして現在 倉敷市 中路 修平
 團児らの午後の散歩の語らいが英語と気づき
 夢かと戸惑う 川崎市 佐久間喜賢

投稿規定

はがき1枚に選者を指定し、未発表の自作を2首・2句まで。住所、氏名、年齢、職業、電話番号を明記し、宛先は〒100-8051 (住所不要) 毎日新聞学芸部、短歌は「毎日歌壇」、俳句は「毎日俳壇」、〇〇先生 (希望選者名) 係へ。毎日新聞デジタルの投稿フォーム

(<https://mainichi.jp/kadan-haidan/>)

でも受け付けています。他媒体との二重投稿や同一作品を複数の選者に投稿するのは厳禁。投稿は趣旨を変えずに添削することがあります。入選作は毎日新聞社の電子メディアやデータベース、アプリ「俳句てふてふ」で公開します。



こちらから
投稿できます